三浦　咲伽（みうら・しょうか）　湘南白百合学園高等学校２年

作品名　神の存在意義とは

読んだ作品　『沈黙』

神は存在するのか、という疑問は、誰もが一度は抱くものだと思う。なぜなら、神の存在は極めて不確かで、その御業ははっきりと目に見えるものではないからである。そのような不確かな存在、言わば、細い糸のような存在を決して断ち切ることのないよう、大切につなぎとめているものは何なのだろう。他でもない、人間の弱さそのものではないか、と、この本を読んで感じる。現実で起こる悲しいこと、辛いことから逃れたいという一心で、人間は神にすがりつく。しかし、未だかつて神の手によって救いを受けた者はいない。実際には、自分は神の加護を受けている、という思い込みが彼らを救っているに過ぎないのである。また、多くの人はそのような問い―神は存在するのか―から目を背けようとする。これもまた、人間の弱さによるものではないか、と今は思う。そのような現実、誰もが目を背けるような根源的な問題にあえて目を向け、小説という形でこの世に残すということは、一体どれほどの勇気が必要なのだろう。

この本を読む前、私は「沈黙」という題名がどのような意味を持つのか、「沈黙」している、その主語は誰なのかについて考えた。そして私はそれを、キリスト教弾圧下の日本に潜伏していたキリシタンたちだと思っていた。この本は、役人に見つからぬよう息を潜めて「沈黙」しているキリシタンたちについて書かれているものだとばかり思っていた。しかし、実際に描かれていたのは、信仰を貫いたキリシタンたちの凄惨な死と、それに対する神の「沈黙」。「絶望」とは、まさにこういうことを言うのだと思った。

ロドリゴが、「沈黙」を貫き続ける神に対して、その存在を疑ってしまったのも無理ないと思う。しかしそれは同時に、彼や、彼の周りにいる人々がこれまで味わってきたすべての恐怖や苦しみ、悲しみが全く無駄なものだったことを意味してしまうということが、どれほど残酷な現実であることか、考えるだけで胸が締め付けられる。

そして結局、神は最初から最後まで「沈黙」を貫き続けた。これでは、神は存在しないのではないか、という疑問を抱かざるを得ないどころか、仮に存在していたとして、そこに何の意味があるのだろうか、と考えてしまう。形だけの信仰の対象なら、代わりになるものはいくらでもある。その対象が「神」である必要性はどこにもない。それでもなお、その存在が強く求められている理由、彼らの信仰の対象が、どうしても「神」でなければならない明確な理由があるとするならば、それは何なのだろう。人々が「神」という不確かな存在に、これほどまでに時間と労力を注ぎ込むのはなぜなのだろう。神の残酷な「沈黙」にはどのような深い意味があるのだろう。たくさんの疑問が残る。

私自身、幼稚園の頃から高校生になった現在に至るまで、カトリックの学校に通い、学校がある日は毎日、祈りの言葉を唱えてきた。はじめは意味も分からず、音だけを聞いて覚え、唱えた。だんだん意味が分かるようになってきても、「祈り」という行為の本質は、高校二

年生になった今でも明確な答えは分からないままだ。ただ一つ、ずっと感じていたことは、自分は今何のために祈っているのだろう、ということである。友達ができたのも、テストで良い点が取れたのも、全て自分の努力だし、先生に怒られたのも、飼っていた犬が亡くなったのも、私が祈りを怠ったからではない。祈ったところで、私の毎日は何も変わることはないのである。ならば何のために私はそれに時間を費やしているのだろう。

実は人々は、神が「沈黙」を貫くということを端から理解しているのだ。その上で祈りを捧げ続けるのは、その行為によって楽になった、救われた、という体験があるからで、それならその行為には大きな意味があると私は思う。どのような形であっても、その心が救われているのなら。

この本を読み終わったあとの余韻や喪失感は、どんな言葉にも言い表すことができない。結局のところ、神は存在するのだろうか。

存在していたところで「沈黙」を貫くだけの「神」に果たして意味はあるのだろうか。ただ一つ、確かなことがあるとするならば、その存在に勇気をもらい、生きる活力を得られる人はどの時代にもたくさんいて、そのような人たちがいる限り、「神」の存在には何にも代え難い、大きな意義があるのではないだろうか。